

[原著]

## 中学生における関係性攻撃傾向の検討

— 一同調行動および学校適応感の関連 —

筑波大学人間総合科学研究科：櫻井 良子

筑波大学人間総合科学研究科：小浜 駿

筑波大学心理学系：新井邦二郎

Relational aggression of tendency among preadolescents  
: Conformity and students adjustment

Yoshiko Sakurai, Shun Kohama and Kunijiro Arai

### 問題と目的

近年、深刻な社会問題のひとつとして、青少年犯罪の凶悪化と低年齢化が指摘されており、また「キレる」という言葉が一般的に用いられているように、突発的・衝動的な怒りの表出が学校教育の中で問題となっている(宮下・大野, 2002)。これらを概観すると、従来は犯罪や非行と関わりがないと考えられていた「普通の子」が、突発的に凶悪な犯罪を起こすことが、近年の少年犯罪の特徴であると思われる。したがって現代社会における子どもの攻撃性の問題は、攻撃的とみなされていた男子や一部の特別な子どものみならず、男女問わず同世代の子供たちの多くに共通する特性として考えていくべき問題であるといえるだろう。

このような「普通の子」の攻撃性を検討するにあたって、有益な示唆を与えられる概念に「関係性攻撃」がある。関係性攻撃とは、Crick&Grotpeter(1995)によると、「直接的な身体攻撃、言語的な攻撃を使わずに、仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した行動」である定義されている。具体的には、みんながその子を拒絶するような噂や嘘を仲間集団内にわざと流す、グループから排除する、グループ内の仲間がその子と話をしないように操作するなどの行動が含まれる。

先行研究において、関係性攻撃を頻繁に行う

子どもは様々な適応上の問題を抱えていることが報告されており、関係性攻撃が高い子どもには敵意的帰属バイアスが見られ(Crick, 1996)、心理社会的適応面において抑うつや孤立(isolation)と関連があることが指摘されている(Crick&Grotpeter, 1995)。

そして、関係性攻撃は男子よりも女子に顕著な攻撃であることが報告されている(Crick&Grotpeter, 1995)。しかし、関係性攻撃に性差は見られないという報告もあり(Gail&George, 1997) 攻撃の性差については、明確ではないといえる。しかし、女子の仲間関係におけるいじめは、近年欧米において社会的な現象として問題視されており(ロザリンド・ワイズマン, 2005; レイチェル・シモンズ, 2003)、性差についても詳細に検討される必要があるだろう。

わが国においても「いじめ」問題において関係性攻撃の概念が重要な意味があるとされており(滝, 2001)、関係性攻撃を用いたいじめに対する防止プログラムを開発することがいじめ問題において大きな意味をもつことが考えられている(松尾, 2002)。

以上より、子どもの関係性攻撃のメカニズムを解明することは、「いじめ」問題に代表されるような子どもの仲間関係での問題行動や社会的適応困難に対するアプローチの有益な知見となると言えるだろう。

しかし、わが国において関係性攻撃の研究は

まだ始まったばかりである。磯部（2003）は、幼児を対象として関係性攻撃と社会的スキルの関連について検討し、関係性攻撃の低減には規律性スキルの習得を目指した社会的スキル訓練が効果的であることを提言している。また、坂井・山崎（2004）は、小学校4～6年生を対象として、表出性攻撃反応、不表出性攻撃反応、関係性攻撃反応と社会的情報処理について検討しており、道具的關係性攻撃児において社会的情報処理に歪みが示されることを報告している。

そして、櫻井（2002）は、中学生を対象として関係性攻撃と社会的スキル、友人感情・友人欲求との関連を検討している。その結果、社会的スキルにおいて、関係性攻撃が高い男子は関係参加スキルが低く自ら仲間の中に入っていく行動が欠けており、関係性攻撃が高い女子は関係維持スキルが低く、よりよい仲間関係を築くための行動が欠けていることが示された。また、友人感情・友人欲求においては、男子は友人感情・欲求とは関連が見られなかったが、関係性攻撃が高い女子は、友人への信頼・安定の感情が低く、友人と同じ行動をしたいという同調欲求が高く、中学生の女子において関係性攻撃と友人関係との関連が高いことを示された。

だが、これらの研究において、関係性攻撃は仲間関係を巧に操作し、集団を動かし、特定の子どもを傷つける攻撃であると考えられているが、その一方で、他者に操作されて「無視」や「仲間はずれ」をしている場合も考えられ、どちらの場合も同じ関係性攻撃としてみなされている。結果として、どちらとも標的となる子どもを傷つけることから、同様に関係性攻撃であるといえる。しかし、他者に操作されて行う関係性攻撃は、攻撃的な意図をもった攻撃行動といえるのだろうか。むしろ、自分が排除されないようにするための防衛的行動や、関係性攻撃を行う子どもへの親密行動とも捉えられるのではないだろうか。従って、同じ関係性攻撃であっても、関係性攻撃を行う子どもの中には、仲間関係を形成・維持し、かつ他者を操作する力をもつ子どもがいる一方で、そのような子どもに操作される側の子どもの存在を考えていく必要

があるといえる。

従来の研究では、関係性攻撃における「他者を操作する側」「他者に操作される側」の区別が曖昧である。そのため、関係性攻撃の2つのタイプを分けて考えることは重要な視点であると考えられる。

そこで、本研究では、第一に、関係性攻撃の2つのタイプを測定する質問紙の作成を目的とする。次に、これらの関係性攻撃が関連すると考えられる「同調行動」「学校適応感」の観点から検討することを目的とする。

関係性攻撃は、その行動意図により2つのタイプに分けられることが予測される。そして、関係性攻撃において他者を操作する側の子どもは、操作される子どもよりも、同調行動が低く、学校適応感が高いことが予測される。一方で、関係性攻撃において他者に操作される側の子どもは、操作する子どもよりも、同調行動が高く、学校適応感が低いことが予測される。

## 方 法

調査対象者：茨城県内の公立中学校1校の1年～3年生170名（有効回答数169名）

調査内容：①関係性攻撃傾向尺度：櫻井（2002）の関係性攻撃尺度を参考に、新たに関係性攻撃における「他者を操作する側」「他者に操作される側」を測定するための項目を加えた18項目を作成した。5段階評定。②学校生活満足度尺度：河村（1999）による学校生活満足度尺度（中学生用）を使用。「承認」（10項目）と「被侵害・不適応」（10項目）の2つの下位尺度からなる。5段階評定。③同調傾向尺度：上野・上瀬・松井・福富（1994）を参考に中学生の対人関係における同調行動を測定するために作成した10項目。4段階評定。④社会的望ましき尺度：秦（1990）による敵意的攻撃インベントリ（Hostile Aggression Inventory; HAI）の下位尺度である「社会的望ましき」10項目を使用。5段階評定。

手続き：各学級において、担任の指示のもと集団で実施した。

結 果

1：関係性攻撃傾向尺度の構造について

まず尺度得点の標準偏差から2項目を分析から削除した。そして作成した関係性攻撃傾向尺度16項目を用いて因子分析を行った。因子間に相関があることが予想されたため、斜交解を求め、仮説から固有値を2因子に設定して因子分析を行った。負荷量が0.4以下の項目及び複数因子に負荷の見られた3項目を除き、再度13項目で因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。しかし、スクリープロットと因子の解釈可能性を考慮した結果、1因子構造が妥当であると考えられた。

そこで、1因子を想定し、改めて関係性攻撃傾向尺度16項目において主成分分析を行った。更に、負荷量が0.4以下の3項目を除いて、再度分析を行った結果、最終13項目における1因子構造が妥当であると解釈した（Table 1）。

以上より、因子分析及び主成分分析の結果を考慮した結果、仮説では2因子に分かれると予

測されたが、本研究では1因子構造からなる尺度を採択した。よって、以後の分析は1因子からなる関係性攻撃傾向尺度を用いて分析を行うこととした。

2：関係性攻撃傾向と同調行動・学校生活満足度との関連について

作成した関係性攻撃傾向尺度得点の平均点を基準として関係性攻撃傾向高群・低群に群分けを行い、男女別に2要因分散分析を行った。その結果、1%水準で被侵害・不適応及び同調行動において男女共に関係性攻撃低群に比べて関係性攻撃傾向高群の方が高いという結果であった（Table 2）。

また、関係性攻撃傾向と同調行動及び学校生活満足度との関連を検討するために、男女別に社会的望ましさを統制した偏相関分析を行った（Table 3）。その結果、男子では関係性攻撃と同調行動において1%水準で有意な正の相関が示された。女子においては、男子と同様に同調行動において1%水準で有意な正の相関が示さ

Table 1 関係性攻撃傾向尺度の主成分分析結果（N=169）

項目	M	SD	因子1	共通性
9 きれいな人が来たら、他の友だちを誘って別の場所に行くことがある。	2.51	1.10	.80	.63
17 みんなで話しているときに、きれいな人が来たら、その人が話に入れないような話をわざとずる。	2.23	1.07	.76	.57
2 きれいな人が、他の人にも嫌われるように、仕向ける。	2.27	1.05	.75	.57
15 友だちといるときに、きれいな人がきたら、その人だけわざと話さないことがある。	2.29	1.11	.74	.55
12 友達と話しているときに、きれいな人がきたら急にだまったりこそこそ話をすることがある。	2.22	1.07	.71	.51
13 誰かにムカついたら、友だちにその人となかよくしないように言う。	2.07	1.11	.61	.37
11 友達のきれいな人とは、自分も仲よくしないようにする。	2.39	1.01	.61	.37
16 みんなで遊びに行くときに、きれいな人にはわざと教えないことがある。	2.86	1.20	.59	.35
8 きれいな人の、よくないうわさを友達に言うことがある。	2.83	1.15	.59	.35
7 きれいな人とおもてでは仲良くしているけれど、その人がいなくなったら悪口を言うことがある。	3.24	1.26	.49	.24
1 きれいな人の秘密は、こっそりとみんなにばらすことがある。	2.98	2.05	.49	.24
4 友だちグループの誰かに腹が立つと、他の友だちに「無視しよう」ということがある。	2.15	1.19	.47	.22
3 友だちがきれいな人を避けて別の場所に行くときには、自分は行きたくなくてもついていく。	2.87	1.01	.46	.21
固有値	5.19			
寄与率(%)	39.94			

Table 2 関係性攻撃の高低群別、性別の平均値（SD）および分散分析結果

従属変数	平均値(SD)				分散分析				
	関係性攻撃高群		関係性攻撃低群		群	性別	交互作用	多重比較	
	男(N=37)	女(N=50)	男(N=42)	女(N=40)					
学校適応	承認	3.06 (0.55)	3.13 (0.58)	3.12 (0.62)	3.24 (0.80)	F=.66	F=.83	F=.05	n.s.
	被侵害・不適応	2.38 (0.66)	2.41 (0.63)	2.06 (0.70)	1.99 (0.67)	F=12.95**	F=.02	F=.25	高群>低群
	同調	2.49 (0.44)	2.48 (0.41)	2.27 (0.36)	2.31 (0.37)	F=10.20**	F=.07	F=.24	高群>低群

\*\* p<.01

Table 3 社会的望ましさを統制した男女別の偏相関<sup>注)</sup>

	適応・満足	被侵害・不適応	同調	関係性攻撃
適応・満足		-0.34 **	0.21 †	0.12
被侵害・不適応	-0.46 **		0.11	0.13
同調	.07	.15		0.44 **
関係性攻撃	.07	.19 †	.36 **	

注) 右上が男子, 左下が女子の偏相関係数

\* p<.05 \*\* p<.01 † p<.10

れ、学校満足感尺度の被侵害・不適応において有意傾向であるが正の相関が示された。

以上より、男女共に関係性攻撃と同調行動は関連があることが示され、関係性攻撃が高い子どもは同調行動が高いことが示された。また、学校満足感において、関係性攻撃が高い女子において被侵害・不適応得点が高い傾向にあることが示された。

### 考 察

#### 1：関係性攻撃尺度の作成について

関係性攻撃を「他者を操作する側」「他者に操作される側」の2つのタイプに分ける質問紙の作成を試みた。しかし、分析の結果、質問紙は一因子構造を支持することが妥当であるという結論に至った。以下、その原因について2つの考察を述べる。

まず1つには、質問紙法で分けることの困難さがあり、調査手続き上の問題が挙げられると思われる。今後は、場面想定法や他者評価といった方法を検討する必要があるだろう。

次に、関係性攻撃の構造の複雑さが挙げられる。個人内要因に加え、操作する子ども、標的となる子どもから行われる3者間の関係から成り立つ行動であることに加え、集団内での社会的地位も影響すると考えられるからである。関係性攻撃において「他者を操作する側」の子どもは、非常に高い社会的認知スキルを持っていることが推察される(松尾, 2002)。しかし、自分よりも社会的地位の弱い子どもを操作する一方で、自分よりも社会的地位が上にあると認知している子どもに操作される側である子どもが少なからず存在することが考えられる。つまり、

関係性攻撃において「他者を操作する」「他者に操作される」両方の行動をとる子どもである。個人内において共に存在する行動を測定するためには、より詳細な手続き及び分析を検討が必要であろう。

また、同じように関係性攻撃が高い子どもでも、「操作する側」「操作される側」では、その背景要因や動機付けが異なる可能性が考えられるため、背景要因からの詳細なアプローチが望まれる。

#### 2：同調行動および学校適応感との関連について

関係性攻撃傾向尺度において「操作する側」と「操作される側」に分類することが困難であったため、関係性攻撃傾向との関連を検討するにとどまった。その結果、男女ともに、関係性攻撃と同調行動に関連があることが示された。櫻井(2002)の結果では、女子においてのみ同調欲求と正の関連が示されたが、本研究においては男子においても同調行動との関連が示された。この2つの結果の違いについては、使用した尺度の違いが考えられ、女子は「一緒にいたい」という気持ちが強く関連すると思われるが、男子では行動レベルで同調行動をとる傾向にある男子は関係性攻撃を用いやすい状況にあるといえるのだろう。

また、男子では関係性攻撃と学校適応感の間に関連は示されなかったが、女子では関係性攻撃と学校適応感尺度の侵害・不適応感において、有意傾向ではあるが正の相関が示された。女子においては、関係性攻撃の高さが学校不適応感に関連することが示唆された。この結果からも、女子において関係性攻撃が学校適応感に関連している可能性があることが示され、このことか

ら女子では友人関係における攻撃が学校生活に  
関与しているといえ、今後のより詳細な検討お  
よび予防・介入が望まれるところである。

### まとめと今後の課題

本研究では、質問紙により、関係性攻撃を  
「他者を操作する側」「他者に操作される側」の  
2つのタイプに分けることを試みた。しかし、  
結果は一因子構造を支持するものであった。質  
問紙における項目作成の限界、および関係性攻  
撃の構造の複雑さが示唆される結果であった。  
しかし、男女共に関係性攻撃と同調行動の関連  
が示され、そして女子においては学校適応感と  
の関連が示唆され、今後の介入において有益な  
示唆を与える結果が得られたといえるだろう。

今後は、関係性攻撃を測定する尺度の信頼  
性・妥当性の検討、更には場面想定法を用いる  
などの測定方法の再検討を行うことが望まれる。  
また、それぞれの関係性攻撃行動の背景となる  
心理・社会的要因を詳細に検討していく必要が  
あり、それらの背景要因から、関係性攻撃の特  
徴を明らかにしていくことが望まれ、今後、更  
なる調査・研究が期待される。

### 引用文献

- Crick, N. R. 1996 The Role of Overt Aggression,  
Relational Aggression, and Prosocial Behavior  
in the Prediction of Children's Future Social  
Adjustment. *Child Development*, **67**, 2317-  
2327.
- Crick, N. R. & Grotpeter, J. K. 1995 Relational  
Aggression, Gender, and Social-Psychological  
Adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Gail S. Rys & George G Bear 1997 Relational  
Aggression and peer Relations: Gender and  
Developmental Issues *Merrill-Palment Quar-  
terly*, **43**, 1, 87-106
- 秦一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作  
成 *心理学研究*, **61**, 227-234
- 磯部美良・佐藤正二 2003 幼児の関係性攻撃

と社会的スキル *教育心理学研究*, **51**, 13-  
21

- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握する  
ための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度  
(中学生用)の作成— *カウンセリング研究*,  
**32**, 274-282
- 松尾直博 2002 学校における暴力・いじめ防  
止プログラムの動向—学校・学級単位での取  
り組み— *教育心理学研究*, **50**, 487-499
- 宮下一博・大野久編著 2002 キレル青少年の  
心 発達臨床心理学的考察 北大路書房
- レイチェル・シモンズ(著)・鈴木淑美(訳) 2003  
女の子どうして、ややこしい! 草思社
- ロザリンド・ワイズマン(著)・小林紀子・難波  
美帆(訳) 2005 女の子って、どうして傷つ  
けあうの? 娘を守るために親ができること  
2005 日本評論社
- 坂井明子・山崎勝之 2004 小学生における3  
タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結  
果予期に及ぼす影響 *教育心理学研究*, **52**,  
298-309
- 櫻井良子 2002 中学生における関係性攻撃の  
特徴 筑波大学心理学研究科中間論文(未公  
刊)
- 滝 充 2001 国際比較調査研究の意義と今後  
の課題 森田洋司(監修) いじめの国際比較  
研究—日本・イギリス・オランダ・ノルウェ  
ーの調査分析— 金子書房
- 上野行長・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994  
青年期の交友関係における同調と心理的距離  
*教育心理学研究*, **42**, 21-28
- 注1)  
関係性攻撃傾向尺度の作成において削除された  
項目は、以下の5項目である。5)友だちに言わ  
れて、誰かを無視したり仲間はずれにすること  
がある。6)友だちが誰かを仲間はずれにしよう  
としていても、自分は従わない(逆転項目)。10)友  
だちが誰かの悪口を言うと、自分はそう  
思っていないでも一緒に言う。14)友だちが別  
の友だちを無視していたら、自分もその友達を  
無視する。18)友達に誰かを「仲間はずれにし

よう」と言われたら、仲間はずれにする。

#### 謝辞

本研究は、「筑波大学人間学類心理学研究法」の一貫として行われた研究の一部であり、人間学類の片良友美さん、小菅亜樹子さん、増田早織さんにご協力いただきました（所属はいずれも当時）。記して感謝いたします。